

安保そして原発「政治力欠けた」反省も

80歳の平和運動家 吉川勇一・武藤一羊

戦後の平和運動に長くかかわってきた吉川勇一、武藤一羊の2人が今年、ともに80歳を迎えた。都内で「祝う会」が開かれ、作家の小中陽太郎、彦坂謙や市民運動関係者ら約150人が集まった。

1950年、東京大学での学生運動で知り合った吉川と武藤は、講和条約・安保条約に反対して52年、ともに退学処分を受けた。2人はその後、原水爆禁止運動などに参加、65年に「ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）」ができる。吉川は事務局長となり、その解散後も市民運動を続けた。武藤もベ平連に加わった後、ピープルズ・プラン研究所などを設立、近著に『潜在的核保有と戦後国家』（社会評論社）がある。

武藤は「単独講和と安保条約締

結が現在の日米関係までを決定している。戦後の運動に、労働運動や学生運動を一つにしていく政治力が欠けていた」と反省。「なお状況を縛っている60年前の選択を拒否する力を持つこと。それが今も巨大な課題だ」とした。

吉川も「自分の活動は失敗の連続だった」としながら、「満州事変の年に生まれて、ずっと戦争反対の運動を続けてきた。もう一度やるかと言われたら、きっとまた同じことをやるだろう」と振り返った。今後については「自民党の政治家が潜在的核保有などと発言しているように、原発は安保と結びついている。このことをきちんと追及できれば、私たちの運動にもまだ可能性がある」と展望を語った。

（樋口大二）